

太宰治中期作品における方法論的系譜の再考

(ポスターセッション)

お茶の水女子大学大学院生 柴田 眞希

太宰治の作家活動は、彼の死後 10 年余りを経たところで、前期・中期・後期の 3 期に区分され論ぜられるに至った。それぞれに、1932～35 年の 4 年間、37～45 年の 9 年間、45～48 年の 3 年間に該当し、この指標は今日の太宰研究の場においても継承されている。なかでも中期は「安定と開花」（奥野健男『太宰治論』角川書店、1960）、「ゆとりある飄逸味が溢れている」（臼井吉見「太宰治論」『太宰治研究』筑摩書房、1956）といった形容がなされるように、他の時期に較べて向日的な作品が多い。

この期の作風についての主要因は、かつては太宰自身の実生活に起因するものと考えられてきた。しかし近年では、その見解も一部改められている。中期諸作品の全面的な私小説的読解は、前期の一部の作品群を引きずったものともいえる。また太宰には自然主義的リアリズムに一石を投じようと試みた一面もあるのだから、作品と作者の実生活を癒着させた説明のみでは見落とされる点がある。そもそも中期は第二次大戦の影響を直接的に受けた期間でもあるため、太宰個人の事情と社会的要請、内的ファクターと外的ファクターが複雑に絡み合っているであろうことは言うまでもない。

このような問題を乗り越え、安藤宏氏は方法論的観点を導入することで、前期から後期までの作風を概観し体系的に論じた（『太宰治論』東京大学出版会、2021 ほか）。しかしながら細部は未だ検討の余地がある。とりわけ中期は期間も長く、また先述の通りファクターは多層かつ変化も激しいため、より細分化して変遷を辿る必要があると思われる。

中期の方法論的系譜を再考するにあたり、発表者は、各テキストにあらわれる〈見る〉こと、〈眼〉

のモチーフに注目したい。というのも、この期の作品には〈見る〉行為、構造が意識的に繰り返されていることが発見できるからだ。加えて、それは太宰作品における芸術家表象と密接に関わっている。したがって、こうした視座は、中期テキストにみられる芸術家の位置付けと手法とを貫きとめるものとして有効であると考ええる。

本報告では、『鷗』（『知性』1940・1）、『雪の夜の話』（『少女の友』1944・5）を起点とし、さらには、従来、中期太宰の作家たる決意を示した一作と見なされる傾向のある『富嶽百景』（『文体』1939・2～3）へと遡って分析することで、中期の方法的な揺らぎの可能性を示し、やや平面化した従来の区分にグラデーションの描出を試みる。